

なごやじょう さんのまる
名古屋城三の丸遺跡

所在地 名古屋市中区丸の内
(北緯 35 度 10 分 50 秒 東経 136 度 54 分 01 秒)
調査理由 名古屋高等裁判所庁舎増設
調査期間 平成 18 年 11 月～平成 19 年 3 月
調査面積 1,089 m²
担当者 池本正明・加藤博紀・武部真木



調査地点(1/2.5万「名古屋北部」)

調査の経過 調査は名古屋高等裁判所庁舎増設に伴う事前調査として、国土交通省中部地方整備局から愛知県教育委員会を通じた委託事業として行った。

立地と環境 名古屋城三の丸遺跡は名古屋台地の西北端に位置し、台地上でも最も高い地点(標高 12～13m)に立地する。これまでに 20ヶ所余りの地点で調査が行われ、弥生時代から近世まで連綿と継続する複合遺跡であることが分かってきている。

調査の概要 今回の調査地点は名古屋城三の丸では南辺の土塁に近く、本町御門のやや西寄りにあたる。隣接して北側には過去に調査された 2 地点があり、そこでは近世武家屋敷に伴う溝、屋敷裏に掘られた廃棄土坑、戦国期に溯る屋敷地の堀、区画溝等が検出されている。

現地表から約 1.2～1.4m まで明治以降と思われる盛土であり、特に南半部分ではその深さまで整地された上にコンクリート製建物基礎が入り、調査区全体が大きく破壊されている。盛土には建物跡に伴うレンガ、建築部材と思われる大型の石材、円礫が大量に含まれる。調査区北側を除く範囲では基盤層を約 1.8m 掘込む大型の攪乱 5 基があり、これらは軍の敷地内に造られた防空壕跡と考えられる。攪乱からは陸軍徽章や「工三」銘のあるカップや皿など陶磁器類、インクや薬などのガラス瓶、歯ブラシ、蹄鉄、ボタン、煙管ほか不明金属製品が大量に出土した。記録によると、付近には陸軍第三師団のうち工兵第三大隊、輜重兵第三大隊等が配され、倉庫群が置かれた場所と想定される。出土遺物の品目や量、良好な遺存状況はそれらを裏付けるものと考えられる。

近世は調査区北東部と北西部に包含層が残存し、土坑はこの範囲にほぼ限定される。北東部は南北に長い長方形で断面箱形の土坑、円形土坑、礎石をもつ柱穴などがあり、一方北西部は浅い不定形の土坑、方形と円形の柱穴が激しく重複する。出土遺物は北東部は焙烙や土人形、焼塩壺など土器の割合がやや高く江戸中期のものが含まれる。北西部は江戸後期～幕末の廃棄土坑があり、瓦、土器、陶磁器類の量も多い。近代の削平の影響を考慮しても、調査区中央から南側にかけての範囲では遺構が希薄であり、これは屋敷地の表側として広い空間が確保されていたためと考えられる。

遺物はほとんど含まれていないが、戦国期と思われる遺構として、近世・近代と軸線が異なる数条の溝がある。最も規模が大きいものは、幅約 3m、深さ 2.4m の断面 V 字状の南北溝があり、埋土上層に明褐色粘土の整地の際の堆積がみられる。これに重複して大塚前半期のうちに幅 80cm、深さ 60cm、断面逆台形の東西溝が掘られ、戦国期の時期に、周辺が大きく改変されていることが分かった。

その他、時期の不明確な遺構として同軸方向の東西杭列、ピット列、溝がある。近代の境界と考えられるが、江戸時代の武家屋敷南限が未だ明確ではなく、境界の位置が踏襲されていた可能性と境界施設の構造について分析をすすめたい。(武部真木)

